

２０２４年度 松蔭中学校・松蔭高等学校 学校関係者評価報告

松蔭中学校・松蔭高等学校 学校関係者評価委員会

２０２４年度学校関係者評価委員会は、「２０２３年度学校自己評価」（各学年担任団、校務担当の各部ごとに実施）、「２０２３年度学校評価アンケート」（全校保護者対象。以下「学校評価アンケート」）、「２０２３年度授業評価アンケート」（全校生徒対象。以下「授業評価アンケート」）、「学校見分」（施設見学・行事見学・授業参観）にもとづき、学校運営の改善を図るために実施した「学校関係者評価」を報告します。

今年度は委員による２度の学校見分（９月１８日 高Ⅰ・２AA（アスリート＆アーティスト）コース対象の特別授業「AA特別講座」、高ⅠＬＳ（ランゲージ＆サイエンス）コースの探究授業「言語探究」、９月２９日 体育祭）を行いました。まず「AA特別講座」では、「良い姿勢が怪我をしない体を作る、ことなど」「姿勢の重要性」を説く講義・実技を見学した。「言語探究」では、自ら問いを重ねて気づきを得るプログラム「クエスチョンX」の取り組みを参観した。１１月２０日には委員による討議を行い、以下の３点を柱として学校運営に対する様々な意見を交換しました。

- （１）キリスト教主義を柱とする人間教育が行われており、人格形成に寄与しているか。
- （２）学校生活のなかで健全な人間関係を構築する指導を実施し、その効果があがっているか。
- （３）豊かな学力定着と進路実現をはかる教育が行われ、その効果があがっているかどうか。

○討議に入る前に「学校の現況と今後の方針」「生徒支援の内容」「教員の働き方改革」「２６年度からの一部共学化」「大災害発生時の学校対応」について情報共有を図りました。

- （１）キリスト教主義を柱とする人間教育が行われており、人格形成に寄与しているか。
- ・冒頭で、学校の建学理念や教育理念が生徒や卒業生に影響を与えているかどうかについての研究報告が紹介された。全国の高等学校を対象としたアンケート調査が行われ、設問「建学の理念、スタンスで在校生、卒業生に影響をあたえているものがあるか？」に対して、キリスト教主義学校、とりわけプロテスタント学校においては、仏教系や無宗教の学校に比べポイントが高かったことが分かった。キリスト教主義の本校で当たり前だと思っている環境（モットー、聖歌、建築物）が共通の財産として「核」になっていることが伺える。（カトリック １５.８％、プロテスタント １６.４％、仏教系 １３.８％、無宗教 １３.７％）
- ・松蔭では定期的なチャペルニュースの発行、春と秋の特別礼拝、宗教週間中の行事があり、生徒がキリスト教の一端に触れる機会がある。秋の特別礼拝では「神様の愛を分かち合うために何でもやってみよう」という「挑戦すること」が説かれた。
- ・宗教部発行のチャペルニュースは、キリスト教を切り口に身近な話題に触れ、様々な社会問題を分かりやすく説いており、生徒の心を動かす内容になっている。
- ・現在、週１回の全校礼拝を週２回に増やしたり、毎日「主の祈り」を唱える機会を設けたりすることで、キリスト教主義教育が一層深まるのではないか。
- ・自分は卒業生だが、同窓会では皆で聖歌を歌うなどして、在校時代に共通の記憶があることを強く感じている。子供たちも将来、同様の思いを持つようになることを想像している。

- （２）学校生活のなかで健全な人間関係を構築する指導を実施し、その効果があがっているか。
- ・探究授業「クエスチョンX」を参観した。「正解」はないが、生徒は他者の様々な意見に触れ、「この人の意見はいいな」、「こんな疑問もあるのだ」という気づきに繋がっていくように想像した。多様な考え方に触れることが人権感覚を養うことにもつながると思う。

- ・SNSはかつて「信憑性のないもの」と思っていたが、「今はいち早く正しい情報を得るもの」に変わっているようだ。使い方についても判断基準が各家庭で異なる。LINEのやりとりは子ども同士では「単語」のやり取りになっており、言葉の遣い方について親の感覚との間に大きな乖離がある。親だけでは子どもに注意できない場合も多い。発信側と受信側の感じ方の行き違いがトラブルになることもしばしばだ。物事を適切に判断する力が学校で養われることを期待したい。
- ・言葉の持つ重みを教育のなかに入れないといけないと思う。家庭でも学校でも伝える必要がある。根気よく子どもと向き合うことがポイントだ。
- ・コロナで人間関係を構築する機会を失っていた影響を受けたと思われる学年がある。現在、中学生を対象に、スクールカウンセラーが担当する、人間関係構築のプログラムを特別授業として行っている。年間５回程度レリジエンスやアサーショントレーニングなどをおこなうほか、全校生を対象として情報モラルや薬物乱用防止教室などを行う。これらのことが人間関係の構築に繋がるものと考えている。

- （３）豊かな学力定着と進路実現をはかる教育が行われ、その効果があがっているかどうか。
- ・授業見分では新たな発見があった。「クエスチョンX」では、学生が自ら問いを考え、コミュニケーションを取りつつ解答を考える。個々の生徒が各自の解釈をしていた点が良い。「答え」がない社会や時代だと言われている中、「答え」は状況により変わっていく。生徒が現時点での「答え」を持っている点が良いと思う。
- ・「AA特別講座」では、正しい姿勢によってより高いパフォーマンスの発揮が可能だと説いていた。「体づくり」から学ぶ授業により、高校時代から基礎的なことを学んでいると様々な応用もできる。効果的な学びになっていると感じた。
- ・学生時代に研究論文の作成で悩んだ記憶があるが、「クエスチョンX」等を通して自分の意見を広げ、人の意見を聞くことで学びや気づきがあるといった経験が高校時代からできるのは羨ましい。
- ・「クエスチョンX」では、アウトプットの練習の機会が多く、社会に出ても必要なスキルを体験できるので、素晴らしいと感じた。
- ・時代とともに自分の考えをアウトプットするプレゼン能力が問われる入試方式が増える中、「言語探究」（総合的な探究の時間）に相当する科目）という授業の設定は進歩的だ。
- ・「言語探究」を作ったときのコンセプトは、「言語（言葉）で自分を表現する」ということだ。「言語」がキーワードということで新指導要領の一期生である現高３から試行錯誤を重ねて始めた。「探究」については、他校では外部業者にプログラム運営を任せる学校が多かったなかで、本校は独自のプログラムを試行錯誤しながら作り上げてきた。これまで各学年で実施してきた取り組みは、次年度からは３年間のシラバスとして系統立ててやっていくことになる。
- ・「英語の松蔭」と思って入学したところ、言語を大事にするということを知った時にとてもいいことだと思った。もっとアピールすればよい。
- ・中学DSでは、通常授業に加えて「国語探求」という特設授業を設けている。GSでは朝の音読や時事ニュースについて短いプレゼンを行うなどの取り組みをしている。中学では、DS、GSともに「言葉」を学びの柱の一つとしている点は評価できる。
- ・自分で課題を見つけることを体験することは重要だ。その後の学習や学問研究にもつながるだろう。問いを考えることは、周囲に対する心のアンテナを張ることである。これが自然に身に着けることができるプログラムを実施している点は素晴らしい。
- ・「英語の松蔭」というフレーズを学校の看板にしている。それはたんに「英語の成績を伸ばす」という意味ではなく、「英語を使って世界を広げ、世界中のどの国、どの地域でも暮らしたり働いたりできる力を育てる学校」という意味だ。

以上、２０２４年度学校関係者評価委員会の報告とします。

（参考）学校法人松蔭女子学院 松蔭中学校高等学校 学校関係者評価委員会規約（抜粋）

第2条（目的）

この会は、学校の現状と課題を明らかにし、併せて教職員による自己評価について、学校関係者による評価を行い、自己評価の客観性・透明性を高めるとともに、学校運営の改善、教育力の向上に資することを目的とする。

第3条（活動）

この会は、前条の目的を達成するために、次の活動を行う。

- 1、自己評価が適切に行われたか、その内容と方法について評価する。
- 2、生徒・保護者による学校満足度調査結果により、学校の現状を把握する。
- 3、授業や学校行事の参観、施設・設備の視察を通して、学校の現状を把握する。
- 4、学校運営の改善に向けた取り組みが適切かどうか評価する。
- 5、その他必要な活動は、学校関係者評価委員の協議により行う。

第5条（組織）

この会は、次の構成員によって組織する。

- 1、学校関係者評価委員 6～8名
保護者代表（PTA本部役員）、神戸松蔭女子学院大学代表、卒業生（千と勢会）代表、その他学校関係者として校長が委嘱する者
- 2、校長、副校長、事務長 4名